

おすすめの本

岡島 慶 准教授
(英語)

(1) 『深夜特急 1—香港・マカオ』 沢木耕太郎 著

新潮文庫 1994年

学生時代に打ち込んだことの一つに「一人旅」が挙げられる。若い時分に自分の目で色々な世界を見てみたい、と漠然と考えてアジアやヨーロッパの国々を貧乏旅行で回っていた。旅の帰結として何が得られたのかはいまだに分からないが、モノを見る感性がまだ新鮮であったうちに様々な事物に直接触れることが出来たのは、ひとつの財産なのであろう。

そんな私の旅行熱を高めてくれたのが、学生時代の愛読書の一つ『深夜特急』シリーズである。本書は、著者のアジアからヨーロッパ最西端までの壮大な旅に基づく旅行記である。香港を出発点とする第一巻からポルトガルで旅を終える第六巻まで出版されている。気鋭のジャーナリストとして頭角を現していた26歳の沢木が、全ての仕事をキャンセルし、路線バスを乗り継いでアジアからロンドンを目指す。そもそもの旅程もなく、その日に泊まる宿も行き当たりばったりで、次にどの国に向かうかも気分次第。そんな自由で破天荒な旅が綴られる。旅の序盤、香港に滞在中の沢木はこう語る「今日一日、予定は一切なかった。せねばならぬ仕事もなければ、人に会う約束もない。すべてが自由だった。そのことは妙に手ごたえのない頼りなさを感じさせなくもなかったが、それ以上に、自分が縛られている何かから解き放たれていくという快感の方が強かった」(64)。沢木の自由な旅に、読者である私もなんだか身体が軽くなり、高揚感を覚えてくる。

本書のさらなる魅力の一つは、著者のみずみずしい視点であり、それを支える文章にあると思う。著者は、旅先で目にした様々な事象を率直に、ときにはユーモアを交えて描き、小さな心のふるえに敏感に反応する。年を取るにつれて、自分がすでに失ってしまった(かもしれない)心のときめきを思い出させてくれる良書である。

(2) 『ぼくらが漁師だったころ』 チゴズィエ・オビオマ著、栗飯原文子訳

早川書房 2017年

本書は、ナイジェリア出身のチゴズィエ・オビオマ(Chigozie Obioma)の*The Fishermen*の邦訳である。2015年に出版されるや同年のブッカー賞最終候補に選出されるなど、多くの賞を受賞し鮮烈な印象を残した本作は、作者のデビュー作である。

チゴズィエ・オビオマは、1986年ナイジェリア南西部の都市アクレに生まれる。キプロスで大学教育を受け、その後アメリカへ移住しミシガン大学の創作コースを修めている。

現在はネブラサカ大学で教鞭を執りながら創作を続けている。20世紀後半以降、アフリカに出自を持つ作家たちがさまざまに移動を繰り返しながら世界中に広がっており、「アフリカ文学」というカテゴリーが持つ定義や意義が多様化し、複雑化している。オビオマはこうした新世代のアフリカン・ディアスポラ作家の中でも最も若い作家の一人であり、新しい潮流の旗手とも言うべき作家である。

本書は、主人公ベンジャミン・アグウが9歳の頃の出来事を回想するかたちで語られる。舞台は1990年代のナイジェリアの都市アクレ。彼らの物語は、ベンジャミンと上の3人の兄たち（イケナ、ボジャ、オベンベ）の絆と愛、そしてその悲劇的な崩壊を中心に展開する。物語の前半は、近所の子たちとの喧嘩や、町を流れるオミ・アラ川での魚釣りの様子など、彼らの日々の暮らしが伸びやかに描かれている。しかし、住民から恐れられ、不浄の場とされるオミ・アラ川と関わりを持ってしまったことが彼らの運命を変えてしまう。ある日釣りの帰り道、「狂人」であり予言者でもあるアブルに遭遇する。アブルは、長男のイケナを名指しし、ある予言を残して去る。その予言とは、彼が兄弟の誰かに殺されるというものであった。イケナを中心に兄弟愛で結ばれていた固い絆は、この予言の重みに耐えきれず、徐々に崩壊し破滅的な最後を迎える。

翻訳は、原作が持つ言葉の鮮度と雰囲気を保ちながらも、美しい文章に仕上がっている。原作ではイボ語のみで表記されている箇所には、物語の流れを損なわない程度の日本語で解説が加えられており、読者の理解を深めてくれる工夫がなされている。

『ぼくらが漁師だったころ』は、読み物としての面白さもさることながら、アフリカやアメリカといった地域の垣根を超えて、21世紀の文学の在り方に多様な示唆を与えてくれる貴重な一冊である。